

読売選書



小田切進

日本近代文学の展開

近代から現代へ

田切進

本近代文学の展開

近代から現代へ



読売選書

32

著者紹介

1924年東京生まれ。1948年早稲田大学文学部国文科卒業後改造社に入り 編集総務をへて1955年以来立教大学文学部に教鞭をとり現在同学部教授。1963年社・高見順氏らとともに日本近代文学館創設者の一員となり、現在同館理事長。早大講師。主著・編著『昭和文学の成立』（勁草書房）『日本の名作』（中央公論社）『日本現代文芸総覧』全4巻（明治文献）『日本短篇小説』全4巻（潮出版社）など。

日本近代文学の展開

——近代から現代へ——

昭和四十九年十二月十五日 第一刷
昭和五十年四月三十日 第二刷

著者 小田切 進おだぎりすすむ

編集人 松田 延夫

発行人 二宮 信親

発行所 読売新聞社

東京都千代田区大手町一の七の二一〇〇
大阪市北区野崎町七五三〇
北九州市小倉北区明和町一の二一八〇二

印刷所 株式会社 三陽社

製本所 協和製本株式会社

定価 一三〇〇円 1395—301320—8715

©, SUSUMU ODAGIRI, 1974

日本近代文学の展開
目

次

I 「近代」の確立……………7

日本近代文学の出発 9

日清戦後・明治三十年代の文学 17

政治小説・社会小説 35

自然主義とその克服 51

II 大正から昭和へ……………61

関東大震災と文学 63

芸術革命と革命芸術 73

プロレタリア文学の動向 102

人民戦線の問題 138

III 戦後の文学……………157

八・一五以後と中間小説 159

戦後の批評 171

六〇年代から七〇年代へ 190

付録 十二月八日、八・一五の記録 221

十二月八日の記録 223

八・一五の記録 280

装丁 枋折 久美子

日本近代文学の展開

——近代から現代へ——

I

「近代」の確立

日本近代文学の出發

明治二十年（一八八七）までのいわゆる啓蒙時代の文学は、いわば二十年代文学の準備の時代だった。江戸文学の伝統は徐々に力を弱め、新しい文学への胎動がしだいに活気を呈しはじめたのである。しかし明治維新は近代的な、人間的な明確な理想をかかげてなされた革命ではなかったため、文学にも新しい人間像は容易に生みだされるにいたらず、はじめは江戸末期らしいの娯楽的な読みものの明治版がさかんに書かれていた。そうした戯作の作者では、仮名垣魯文が文明開化の新風俗をからかい半分に描いた新しい滑稽本『西洋道中膝栗毛』（明治三）や『牛店雄談安愚楽鍋』（同四）などを書いて、きわだった活躍を示した。漢文によって明治の新風俗を描いた成島柳北の『柳橋新誌』（同七）には、新政府の要人や役人にたいする諷刺ようしが生かされていて、こうした漢文戯作の高踏的なユーモアが愛されたりしたのである。

明治十年代に入ると、デフォーの『ロビンソン・クルーソー』をはじめ、ジュール・ベルヌの科学

小説や西欧文学のさまざまな傑作が次々と抄訳または翻案された。デュマ、リットン、ウォルター・スコット、ピクトル・ユーゴー、ディケンズ、シェークスピア、セルバンテスなどが次々と日本に紹介され、新文学の成立をうながす大きな役割をはたした。翻訳小説の中には、当時青年たちが抱いていた政治への関心を通俗的に生かす要素があつたので、その延長に、自由民権運動の闘争の一手段として政治小説が現われたのである。

政治小説の代表作のうち矢野竜溪の『経国美談』（明治一六―一七）はギリシア史から題材をとり、テーベの独立を史談として描き、東海散士の『佳人之奇遇』（同一八―三〇）は日本人を主人公として世界のさまざまな小国の亡国談、虚政談などに独立運動家の恋愛をからませて描いたもので、末広鉄腸の『雪中梅』とともに青年たちのあいだで熱狂的に読まれた。古代ギリシアや外国に材を得ているのは、政府によって日本の現実をとりあげることを禁止されていたからである。結局政治小説は政治的な啓蒙、政党の理想宣伝を目的とした文学だったため、民権運動の敗退と運命をもにしたが、まだ文学が童蒙婦女のもてあそびと考えられがちだった時代に、文学の価値の自覚をうながす役割をはたした。

明治二十年前後になっても、まだこうした実利的功利的文学観と、文学を遊戯と考える古い認識とが根強くのこっていたが、右の政治小説『佳人之奇遇』が発表された明治十八年、坪内逍遙によって古い文学観を排し、写実を唱える『小説神髓』があらわされた。逍遙の文学論は、その根底に人間性

の全体をとりあげようとするリアリズムの主張をふくんだものだったが、現実にたいする批判的態度が、その批判から生まれる理想をも否定する現実主義にすぎなかったため、その実作として翌年へかけて発表された『^{一説}三歎 当世書生氣質^{かたぎ}』には旧文学のかけが多く、風俗的なリアリズムを抜くことができなかつた。

日本近代文学の出発を告げる記念碑的な小説『浮雲』第一編が発表されたのは明治二十年である。作者の二葉亭四迷は十九世紀ロシア文学の影響のもとに、明治の社会に生まれた小市民的な知識人を主人公とし、天皇制の官僚制度からはみだされていく主人公の心理を執拗に追及した。日本における最初の近代的な人間像が彼をとりまく明治社会の拘束とともにここにはじめて描きだされ、わが国最初の近代小説となつたのである。

ところで『浮雲』は言文一致の新しい文体と、細緻な描写の技法という点でも当時の文壇を驚かせた。二葉亭はツルゲーネフの短編『あひびき』や『めぐりあひ』など、日本近代文学の成立に、『浮雲』に劣らぬ大きな影響をあたえるきわめて独創的なすぐれた翻訳をも残した。このころから日本語の文体の近代化という試みが活発に行なわれるようになり、二葉亭の右の努力のほか、山田美妙の『武蔵野』（明治二〇）『夏木立』『蝴蝶』^{とよう}（同二一）、嵯峨の屋お室の『初恋』（同二三）のような結実が示されるにいたつた。

美妙と同じ文学結社硯友社の中心的存在だつた尾崎紅葉は、美妙よりやや遅れ、『^二人色懺悔^{いちごんげ}』（明治二三）で文壇に登場した。西鶴のリアリズムに学んで描写と文章の近代化をはかつた紅葉は、『伽羅^{きやろ}

枕』(同二三)『二人女房』(同二四)『三人妻』(同二五)などの彫琢(ちようたく)の作品に早くも円熟した技量を見せた。これらの小説は変化に富んだ物語と世相のこまかい描写、人間心理の追及を巧みにからませたもので、紅葉は一躍流行作家となったが、リアリズムというには不自然な誇張が多く、逍遙(せうぎょう)の写実主義の理論を中途半端のまま受けついだ形になった。

紅葉が文壇にデビューした同じ明治二十二年に、幸田露伴も『風流仏』を発表して認められた。露伴はつづいて『一口剣』(明治二三)『五重塔』(同二四―二五)などに理想主義の傾向のつよい独自の美の世界をひらき、青年知識層のあいだに熱心な支持者をもった。この二人は二、三年後には(紅葉時代)と並称されるほどの存在となったが、そのころはまだ二十五、六歳の青年にすぎなかった。露伴、紅葉のほか夏目漱石、正岡子規、斎藤緑雨らは慶応三年(一八六七)生まれだったから、日本近代文学の夜明けともいうべき明治十年代を十歳代としてすごし、『浮雲』出現の時、二十歳になったばかりだった。二十年代に入ると、こういう若い青年たちによって、近代小説へのさまざまな努力がようやく多彩にくりひろげられるにいたったのである。

紅葉、露伴につづいて、明治二十三年(一八九〇)に森鷗外が『舞姫』を書いて登場した。前年、妹の小金井喜美子らと訳詩集『於母影』(おぼかげ)にはじめて西欧近代の抒情詩(じやうじゆ)を美しい日本語にうつしかえた鷗外は、この短編小説に、目ざめた近代知識人が官僚社会の古い秩序に屈服する悲哀と感傷とをみずみずしい筆致で描きだし、さまざまな反響をよんだ。鷗外はついで『うたかたの記』『文づかひ』など

の抒情的な短編を発表し、さらに『即興詩人』（明治二五―三四）などのような独創的なすぐれた翻訳を次々と発表していったが、一方では近代批評の確立をめざして雑誌『しがらみ草紙』（同二二―二七）をおこし、ドイツ美学に拠りながら自己の理想を重んじる浪漫主義の立場にたち、二十年代文芸批評の発展をつくりだす多くの発言をここにくりひろげた。鷗外は紅葉ら硯友社の文学観念を支えていた逍遙の写実の理論のあいまいさを徹底的に批判し、逍遙も鷗外の觀念論的美学に反駁を加え、いわゆる没理想論争がおこなわれ、さらに山路愛山と北村透谷との間で（人生文学相渉論争）がたたかわされるなど、文学の本質をめぐっての応酬もさかんに行なわれるようになった。

二十年代に批評家として活躍し、近代文学觀念の形成に寄与したものに、右の鷗外らのほか内田魯庵、石橋忍月、それに前記の斎藤緑雨たちがいるが、中でも透谷は、封建的な道德理想に反抗し、功利的・実利的な文学観にもきびしい批判を加えて、その束縛からのがれるため芸術主義の中に浪漫的な自我の解放をもとめ、『厭世詩家と女性』（明治二五）『内部生命論』（同二六）など卓抜した評論をした。明治二十六年に、透谷は島崎藤村らと雑誌『文学界』を創刊し、浪漫主義の文学運動を起したが、翌年はげしく燃えつきてしまうように、二十五歳の若さで自殺した。近代文学の意味、そしてその目的や方法を明らかにした透谷の評論は、藤村をはじめその後の日本近代文学の展開に深い影響をあたえる画期的なしごととなった。

日清戦争をさかいに日本の近代文学はいわゆるシュトルム・ウント・ドランク（疾風怒濤）の時代を

迎えた。二十年代文学を支配した硯友社の戯作文学は、日清戦争による社会的激動のなかで揺らぎはじめ、『文学界』中心の浪漫主義による近代的な人間観念・文学観念がようやく時代の前面に押し込まれるようになった。個性や主観を強調する浪漫的な自我は、またおのずと社会にたいする自我の關係を意識しなければならぬ。『文学界』の出版をいろうとした浪漫主義は、しだいに現実の社会にたいする関心に向かつていかざるを得なかった。樋口一葉がこの雑誌に発表した『雪の日』（明治二六）『やみ夜』『大つごもり』（同二七）『たけくらべ』（同二八）などは、抒情的な性格が強かったが、明治社会で下積みされた女たちの暗い現実を鋭く照らしだすきわめてすぐれた作品となり、それまで古めかしい美文調の小説を発表していた同じ作者のものとは思えないほどの、みごとな出来ばえを示した。

一葉はさらに『にぎりえ』などの傑出した作品を書き、流星のように突然輝いたかと思うと、たちまち病死して消えてしまったが、文壇主流の硯友社に属する若い世代たちが、日清戦争をさかいに、半戯作的な文学をいわば内がわからつき破るように、新たな文学動向に進みでた。広津柳浪はいわゆる『深刻小説』に社会の暗黒面や不合理を描き、川上眉山は『観念小説』と呼ばれる作品に、世俗社会への強い批判を示した。『夜行巡査』（明治二八）などに、封建的倫理の非人間性とその固定化・形式化への激しいプロテストをたたきつけた泉鏡花も、紅葉門下の新進で、眉山とともに観念小説の代表的作家と見られた。こうした若い世代たちの動揺や飛躍に刺激されて、紅葉も口語文体に創意をこらした『多情多恨』（同二九）で新生面をひらくべくつとめた。さらに紅葉は明治三十年代に入るとふた